

## C.-N. ルドゥの理想的都市構想における労働・教育・性愛

小澤京子（埼玉大学）

革命前後のフランスで活動した建築家クロード＝ニコラ・ルドゥの著作『芸術・慣習・法制との関係の下に考察された建築』（1804年、以下『建築論』）は、彼自身が設計を手掛けた実在する王立製塩所をモデルにしつつ、工業生産を基盤とする理想的なコミュニーの計画を展開したものである。そこには、共同体を統治する秩序や制度が、建築意匠や都市構造（建築物の配置関係）として体现されており、フリーメイソン思想の反映と同時に、「視線」による支配と管理という契機、また労働・生産を通じた社会的紐帯による共同体（コミュニー）という一種のユートピア的都市構想を読みとることができる。

例えばルドゥがシャルル・フーリエに影響を与えた可能性については、フーリエ研究においてはしばしば指摘されてきた。しかし、ルドゥ研究の文脈において、彼の「社会制度改革」志向に焦点を当てたものは未だ少ない。本発表では、『建築論』で展開される理想都市構想を対象に、とりわけ「労働」と「教育」、そして「性愛（の管理）」という契機に焦点を当てる。「労働（travail）」と「教育（éducation）」は、近代的なディシプリン（規律・訓練）という側面を有すると同時に、当時の文脈では性的なニュアンスも含有していた概念である。本発表では、この「二重性」に着目する。

具体的には、ルドゥのテキストにおける「労働」「教育」「性愛」にまつわる記述を分析し、それらが建築案や都市計画案にどのように反映されているか（あるいは、矛盾をきたしているか）を検討する。ルドゥによる性的な「規律訓練」構想が明確に体现されている一例が、「オイケマ」（青少年の性的教育のための建築物）案である。これは性的放蕩のための建築物でありつつ（ルドゥのサドとの共通性）、青年を道徳や法に向けて導くという点では、ルソー的な教育観とも通底している。性と教育をめぐるこの両義的な性質は、「オイケマ」の形態（立面図では平凡な2階建ての建築物だが、平面図は男性器を模している）にも反映されている。

あわせて、サドやフーリエといった隣接する時代の思想家・文筆家たちの性愛・労働・ユートピア的都市・共同体論に関する記述を分析し、彼らが「労働」「教育」「性（恋愛）と規律訓練」というテーマをいかに連関させていたのかを整理・体系化した上で、ルドゥとの比較を行う。ここからは、ルドゥの立場やその特徴・独自性と、同時代の論者との相互影響関係が明確になるだろう。

本発表の意義は、ルドゥという新古典主義時代（啓蒙主義時代、フランス革命期前後）の建築家を、建築史に留まらず、同時代の思想というより広いパラダイムにおいて位置づける点にある。この分析を通じて、革命後のフランスにおける身体イメージ（生物学・病理学・性概念）、またそれと相互影響関係をもつ政治性が、建築という分野において、新たな視角から明らかになるであろう。